

イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

# イタリア人ってどんな人？

ユキーナ・富塚・サントス

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

1	ミラノへの凱旋 .....	3
2	イタリア買い物指南 .....	4
3	イタリア人のセンスとは? .....	5
4	イタリア人の好きなもの .....	8
5	イタリア人のテーマ曲 カヴァレリア・ルスティカーナ .....	11

## 1 ミラノへの凱旋

ミラノの知人宅にお世話になっている。

エスラー大学のエクステンジを早々に切り上げ、フランクフルトで某投資銀行日本オフィス、インヴェスト部門のボス、バニースと面接をした。そして、最終的にミラノに戻ってきた。我々MBAの卒業式に参加するためである。

エスラー大学MBAからの成績証明書はまだ届かない、当たり前だが、試験のスケジュールもなるべく前倒しにして、駆け足で試験を終わらせた。最も危ないと思っていた債権ディリバティブの試験もなんとかクリアした。エスラー大学の教授、アシスタントは今頃採点に追われている頃だろう。私が正式なグレード、及び終了証をもらうのはおそらく1月になるだろう。それまでは、私の卒業証書は空欄だが、卒業自体は問題ないという意味の連絡を、イタリアサイドからもらっていた。

修士の称号をもらうべく、我々は衣装（黒いマント）を着て式典に臨み、お昼過ぎまで終わった式典の後、クラスメート達は深夜開始のオーラスのパーティのため、体力温存と昼寝をしにもどった。

居所が一箇所に定まらず、根無し草のような生活をしている私にとって、突然（でもないか・・・）のパーティは少々困る。衣装がないからである。そうはいっても、そこはイタリア、しかもミラノである。最もセンスのいい、パーティドレスには事欠かない。日本の数百倍、いや、日本では絶対に見つけれないであろうドレスが、日本の十分の一程度の値段で手に入る。

卒業式前日にミラノインした私は、当該、長年ミラノに暮らすこの知人の勧めにより、さるブランドのアウトレットの店にでかけた。値段はどれもリーズナブル、パーティドレス系のワンピースが一枚5000円から1万円程度である。しかも、申し訳ないが、あえて言わせてもらえば、私に良く似合っている。

アメリカ病のお陰で、一気に、異常なほど太った。特にひどいのは、腰まわり、胸、腕、太ももである。顔はそれなりの太り方である。が、しかし、ここイタリアの服はある程度太ってないと話にならない。昔は38というサイズ、服のサイズとしては、最小、かなり探すのが困難なアイテムを着ていた。若干太ったとして、着れるのは、40か、と思っていたが、実際にあつらえたようにピッタリだったのは42だった。おそらく日本の9号ではないだろうか。

## 2 イタリア買い物指南

昨今は、洋風の食事、生活習慣の西洋化の影響も大いにあり、日本女性の体型は欧米人化、特にアメリカ系に近くなっていると私は思っている。

背は高いが、体の厚みが無く、腰まわりの割には、胸が小さい女性というのが、日本で数多く見かける典型的な日本女性の体型になっているような気がする。失礼ながら、私はこれと全く逆、小柄、体の厚みがあり、腰まわりはそこそこ、胸板厚い体型なので、このイタリアンスタイルでも38がベストであった。

しかし、今となっては、腰まわりは、十分、ウエスト、腕にさらに脂肪をつけている。イタリアンが似合わない訳はないのであった・・自分が以前からこの手のイヴニングドレスは持っていてもいいなあと思っていたアイテム、さらには着心地がよさそうで、今の自分の体型と雰囲気 matches しているワンピースを10着ほど試着した。

この中から最終を2、3点に絞り込む。この場合、2と3、数字は問題ではない。問題は最後の1点を選びぬかないことである。迷ったら、二つ買う、三つ買ってでもいい。同じものが再び自分の目の前に現れる可能性はゼロに近い。この先、最低でも10回は着れるであろうと思うシチュエーションが思い浮かべば、即刻買いである。

人の体型は千差万別、特に、私のような小柄な女性にとっては、合う服自体を探すのが難しい。本当に自分が必要としている、デザイン、素材、色であれば、そしてさらに、このような逸品を探す手間隙、機会の稀少性を考慮すれば、たとえ、二つ三つ一度に買ったとしても、決して高い買い物ではないのである。買い物に関して、女性の経済的観念が生かされていないと思うのは、このような投資に踏み切れない点である。

ここにおける日本人女性大多数の選択は、最も無難な、結果的には似合っていない、しかもダサいものを、迷った挙句に一点買う、もしくは結局買わない、ということである。いろいろ迷って、やっぱり、もったいないから、3着いっぺんに買うのは高すぎるから等々の理由で、似合いもしない服をあまり魅力的でない値段で購入し、同じような買い物パターンをエンドレスに繰り返すことに陥る。

安物買いの銭失いとはよく言ったもので、似合わない服、気に入らない服は結果としては着なくなる。着ない服をいつ来るか判らない「いずれ着るときが来るだろうから」という機会のために購入するのは愚行というものである。

一方、好きで買った服、気に入って買ったアイテムは買った直後から着たくなるものである。普段は断るであろう、飲み会の誘いも、新しいお気に入り見せたさ、着たさにフットワーク良く受けることになる。付き合いの幅も広がり、新しい可能性も待っている・・

試着室の中では3つ、全部買うのは、買いすぎだよ・・と思っても、結果的には、過剰 (troppo) ではないのである。再度指摘しておく。問題は一時の支出総額ではなく、タイミングの問題だということである。機会費用、この投資がもたらす経済効果を現在価値におき戻して比較すれば、高い買い物か否か、即座に判別がつく。

繰り返すが、「迷ったら、二つ買う」である。現に私はこうしてイヴニングドレスを二つ、コートも二つ即買いして持っている。これに関しては、ああ魔が差したとは思っていない。

毎回着るたびに、何て似合うんだろうと思っている。誰が何といても、気に入った服を着ることで自分に期待されるパフォーマンスの向上は想像以上のものである。さらにはその服を着て乗り込む敵陣、自分の戦いぶり、戦利品の数々、とにかく武勇伝が作れるのである。

戦闘服か、甲冑か、コスチュームは単なる飾りではない、着た人間の中身と、その身が遭遇する未来を変えることができるものである。

### 3 イタリア人のセンスとは？

話を戻す、イヴニングドレスを着る。不通の女性なら、次に探すのは服と靴である。

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

が、しかし、ここは大いに違いのあるところである。私は翌日、卒業式終了と同時に、ホテルのルームをシェアしている友人にスーツケースを預け、ミラノ中央部（チェントロ）で買い物を続けた。

真っ先に向かうのは、エトロである。私がエトロの女であることは、以前述べた。エトロで身を固めているわけではない、イタリアンリバティーで上から下まで固めるには、私は少々、センシヤル（官能的）すぎる。

エトロの香りは、ああ、そういえば、気がつくとも10年弱も身に付けている。その間私の香りが製造中止になったということは聞かない、このときもやはり私の香は健在であった。期間限定品をいくつか試し、さらに店員といろいろ話しをして、サンプルをもらい、私のボトルを購入した。行き先定まらない身ではあったが、普段身に付ける香りはここでしか買えないのである。まず自分が普段、身にまとうもの、しかも、無いと困るものをゲットした。

次に目指すのはモンテナポレオーネにある高級下着専門店、ラ・ペルラである。

当該イブニングドレスも、試着しているときから、どのペルラとあわせるか考えてはいた。しかし、二着のうち、今回のパーティで着ようと思っているドレスは、ベストなものが見つからない。ふん・・では、やはりペルラに行くか・・と思った。

合うものがなくても、ペルラには行っていただろう、全く太って体型が変わってしまったら、合う服、今の自分に似合うサイズの下着を身に付けるのが鉄則である。

ペルラではイタリア語で店員と話をする。欲しいもののイメージを伝える。一度書いた内容なのであまり触れないが、数点もって、広い試着室で試着する。店員にいろいろチェックしてもらい、話をしながら、好みのアイテムを絞り込んでいく。

例のイブニングドレスには、どうかと思ったが、これから先、何回か着るであろう、紺スーツには丁度いいかなあと思う、いい素材、デザインのものもゲットした。さらに余談であるが、目の玉が飛び出るような値段である。当然タックスフリーである。

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

しかし、重要なことは問題は値段ではなく、下着というものの重要性、さらにその質の高さである

靴、鞆は後回しである。すでにもっているアイテムの中で何とかするようにしたほうがいい。ここで、いわゆるファッション雑誌に載っているように、頭のとっぺんから、足の先までそろえてはいけない。完璧なアイテムだけをそろえても、物質に着られるだけである。ブランド品で固めても、服に着られている人、これくらい見ている気の毒になることはない。その服にかけたコストが気になって、価値温存のために精魂使い果たしているのが判る。これでは、服を着ることで、自分の魂、スピリトを養うことにはならない。

本当に体と、自分というキャラクターに似合うドレスを着て、あえて人には見せないが、そのインナー（下着）をキチンとする。スピリトを養うための、香りを身にまとう・・・

大人の女であれば、これで十分すぎるくらい十分なんだとおもう。

案の定、私は引越し人生真っ只中であることもあり、本当にあわせたい、アクセサリーをホテルにもってくるのを忘れ、パールで代用した。服、アクセサリーなど、物質同士を100%マッチさせるよりも、それを着る生き物である人間の気と、私に着られたがっている洋服の気、さらには服にこめられたデザイナー、生産者の気のマッチのほうがはるかに大切なのである。

モンテナポレオーネ通りは、銀座中央通り、表参道などと並ぶブランドショップ通りである。相変わらず人気のブランドの大きな紙袋を持って、「地球の歩き方」片手に店を探している日本人を多く見かける。日本で買ったと一目で判るコートとGパンにスニーカーという出で立ちである。ハンドバックは肩から「たすき」がけ、海外旅行の基本を地で行っている方々である。

さんざん働いて、やっとの思いでとった休み、ブランドの逸品を買いたいのは良くわかる。

おそらく、12時間のフライトのあとでつかれきっていることだろう。それでも、ここで日本から遠く離れたミラノで、彼女ら、典型的な日本のOLの方々が「必死の思いで楽しもうとしている」ことが、気の毒のように思えてくるのだ。

ブランドではないが、気持ちより色合いのコーディネートで、エトロの小さな袋と、ペルラのクリスマス用のパッケージをもって歩いている私は、日本人の中でも異色である。

何のためにその物を持つのか？服をきること、ブランド品を身に付けることは、一体全体、何であるのか。その目的について今一度考えてみるのもいいような気がした。

## 4 イタリア人の好きなもの

田舎的騎士道精神とでも訳そうか・・・siciliaが舞台のオペラである。序曲といいアリアといい、これでもかイタリア人的なノリの太いに楽しめるオペラだと思っていた。

ところが、今これのインテルメディア、間奏曲を聴いている。スローで流れるようで、美しく、そしてとてもせつない旋律である。

8月の半ばにミラノを離れてアメリカに移った。アパートの荷物をやっこさダンボールに詰め込み、当該知人宅にまとめて預けた。モッコーニMBAに入学したとき、まとめてもらったレジストレーションパックの中にCDが入っていた。ミラノの案内、学校の宣伝用DVDだと思ってあけずにいた。

そのパッケージを開いた友人が、オペラのアリア集だったよと教えてくれたので、当該知人宅で、荷物の整理をしながらBGMに聞いていた。定番のアリア数曲が流れたあとで、この曲がかかった。

何かの映画の有名なサビ部分で使われていたような気がする。モリコーネがアレンジしたのか・・・イタリア映画、「ゴットファーザー」であったかもしれない。思わずタ

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

イトルを確認した。良く聞く曲ではあったけれど、まさかカヴァレリア・ルスティカーナだとは思わなかったからである。後から気づいたが、アリーマクビル初期の頃にも、うまいなあと思える使い方をされていた。

カヴァレリアは、シチリア島の山村、片田舎で、人妻に恋した青年が、キッタハッタで泥沼になる愛憎劇であったように記憶している。こんな、あたかも繊細な男が、かつての青春時代の切ない恋を思い出す回想シーンのような、苦しく切ない旋律が、このドロドロしたオペラにあったのが意外であった。

私のカメラに収まった数々のカヴァレリア青年達を思い出す。最後のお別れパーティーは、開始は深夜 11 時、終わったのは明け方の 5 時近くであった。ミラノのアート地区、ブレラ地区界隈のカフェを貸しきって、ほとんどの生徒が繰り出していた。

私は終始撮影と、踊り、ドリンクゲットに忙しかった。4ヶ月のアメリカ暮らしの後である。授業その他は、多いに充実していても、生活に最も大切な二つの点で、私は多いなる失望を味わっていた。一つ、メシがまずすぎること、二つ、イケメンがないことである。とにかくアメリカ人はダサイ。本当にダサイ。お前らに美意識ちゅうもんがあるのかあ！！と喝を入れてやりたくなるほど、ダサダサであった。

エスラー大学は本当に世界各国から生徒が集まっているので、人種も多彩である。しかし、イタリアで見かけるような、ほほう、美しいなあーとため息がでるような美形がない。これはマンハッタンでも、ボストンでも同じであった。

このパーティーの夜は、久々に美味しイタリアンを食した。ヴェジタリアンの私が本当に美味いとうなる野菜料理、パスタ、そしてドルチェを地元の赤ワイン、バローロと並び称されるバルベラでいただく。ボトル一本あけて、体が12月のミラノの夜に繰り出すのに、ちょうどいい温かさになる。

ナヴィリオ運河付近には名物の霧が立ち込めていて、オレンジのライトに照らされて、石畳の街がいつそう幻想的になる。凍るように澄んだ空に、見事な満月が浮かんでいた。「ラ・ボエーム」の有名なアリア、冷たき手を、などを酔っ払った勢いで大声で歌いながら、ホテルに戻り、お待ちかねのコスチュームに着替えてパーティーに繰り出した。

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

到着したのは12時半頃だったが、ちょうど皆がわっと集まりだす時間だったらしい。カフェの入り口には人だかりがあった。インターナショナル MBA、イタリアン MBA あわせてほとんどの生徒が来ていた。知らないのは私のいない間、変わりにエクステンジ（交換留学）で当ミラノの MBA に来ていた人くらいだろうか。

ああ、これぞ美形の国イタリアと思わせるイケメン達を見て、久々に私のサングエ（sanguine 血）が多いに循環するような思いがした。

MBA の生徒は北から南から、サルデニアやシチリアといった島からも来ている。人種は若干ちがうけれど、みるからにゲルマンの血をミックスした北系の若者、黒髪、黒い瞳の南の青年、ポンペイの壁画を思わせる彫の深い顔立ち、長いこと見ていなかった、懐かしい風景だった。

美しく、享楽に長けていて、悔しくなるくらい美を身に付けている人種、イタリア人と暮らした1年は長いようで短かった。ここに来なければ永遠に知ることができなかったものを多く学んだ。時にはバスタ（もう十分）と思うこともあった、いや、バスタと思うことの方が多かったかもしれない。バスタという体験よりも、バスタの種類を体験するほうがはるかに有効であることは言うまでもない。

太陽の少ない冬よりも、太陽にさらされる、オーソーレミーオを歌いたくなる太陽に照らされる時期の長い国。灼熱の太陽に負けないように人々は体力を温存し、踊りに、恋に、歌に生きる。世俗的な欲望を誰も否定しない。少々やりすぎたかな、と思う、そんなときの罪の許しのために、セクシーなマリアが存在する。カトリックは依然として、美しく、豪華で、多くの平民の上に君臨している。

かつての日本が封じ込めたものを色濃く残す国、イタリア・・・何と、数多くの事を私は学んだのだろう。

本当に、完全な市場社会、実力社会を目指すなら、アメリカに行くべきである。実力社会とは、世界各国共通の実力すなわち、数量主義を意味する。これを潔しとするならば、迷わずアメリカに行くべきである。

## 5 イタリア人のテーマ曲 カヴァレリア・ルスティーカーナ

数量とは全く逆の美という質を重視する社会で勉強できたことは、私にとっては多いにプラスであり、重要なことであった。最初からアメリカ社会に身を置いていたら、自分のセンスを殺すことのジレンマに落ちいていたかもしれない。

今、このカヴァレリア・ルスティーカーナは「ゴット・ファーザー」のラストシーンのBGMだと確信した。ラストシーンで上演されていたオペラは別のものである。しかし、シチリア島、パレルモのテアトロマッシモで、ドラマがクライマックスになり流れるBGMはこれだろうと思う。

イタリアにどっぷり漬かった人間として言わせてもらう。これ以上のBGMはない。

イタリアを象徴するにはエレガントでなければならない。美と同様、その裏側の欲望もあからさまであっていい、旋律はわかりやすいものが多数並ぶよりも、こんなふうに、思い出せないフレーズを組み合わせて欲しい。そして、そして、最も重要なことは、切ないメロディーでなければならない。エレジー（哀歌）のエレメントを持って、美しく、哀しく泣いて欲しい。

カヴァレリアの間奏曲は、まさにイタリアでの思いを語るには必要にして十分であった。言葉では語りつくせない、けれども、切なく、ほろ苦く、それでいて忘れられないほどドルチェ、甘い物語、それがイタリアである。

ゴッドファーザーでは、アル・パチーノの、かつての自分の栄光、罪、咎、そして愛がフラッシュバックする。主人公のマイケルが「テアトロマッシモの現場」で遭遇する「事件」の裏に思い描くことである。

ダンボールの自分の荷物をすべて整理しながら、私もこのイタリア社会でおきたこと、イタリア人、切ない心、完璧すぎる美、日本に居たなら決して体験することのできない希少な世界、アウトサイダーである快樂と悲しみをあれこれ思い出した。

## イタリア人ってどんな人(イタリアカルチャー早分かり)

By ユキーナ・富塚・サントス

彼らのパッシオーネ（情熱）もエゴイズム（利己主義）もすべてが美しい旋律の中に溶けていく・・・

イタリアという国、これを一言で語りつくすのに、これ以上のテーマ曲は簡単に探せそうもない・・・